

5. 中学部における学習指導の原則

以上に述べた観点から、日々の授業が行なわれるのだが、いかに計画が充分であっても指導実践が不十分では、初期の目的を達成できないのは当然である。

そこで中学部では、生徒指導の原則を次のように考えて常に研究的態度で取り組み、指導法のより効果的なあり方を模索しながら日々の実践と取り組んできている。

- (1) 反復練習の原則 (2) 具体化の原則 (3) 個別化の原則
(4) 生活活用の原則 (5) 集団化の原則

これらの指導の原則は、何も障害児教育のためのものではない。教育という営みの中で、至極あたり前のことである。

以上、中学部の学部経営・学級経営の基本的立場と、中学部の指導を生活日課表を中心に説明したつもりである。

II. 中学部の研究活動との取り組みについて

1. 研究の取り組みの経過

昭和53年度の養護学校の発足と同時に取り組んだ教育課程の編成では、中学部は4段階の内容を中心に取り組んだ。また、指導法については「表現化に視点を当てた」指導法の工夫と取り組んできた。

その中で中学部の指導では、社会化を中心にして、小学部からの自立化を深化・拡充し、高等部への作業学習の啓発経験との取り組みを配慮し、「生きて働く力」の育成・強化をはかることの大切さを学んだのである。

昭和57年度からは、前年度までの指導法との取り組みが、授業の形態や教育課程の内容の検討が中心になり、障害児教育が最も大切にしている個人差に応じた一人ひとりの指導に問題の視点をしぼり、研究と取り組む必要を反省し個人差を配慮した指導法の研究と取り組んだ。

研究の中で、社会的自立をめざす子どもたちは、一人ひとりが「豊かな心を持って、たくましく行動する子」ではなかろうかという仮説のもとに、「生きて働く力」の育成・強化と取り組んだのである。

その中で中学部では、豊かな心もたくましい行動も、重度多様化していく生徒にとってなかなか大変なことで、そんな子をめざすことに疑問すらわいてきたのである。

反面、どんな重度多様な生徒であっても、それなりに豊かな心は持っているし、それなりにたくましい行動をしているのではないか。言い換えると、生徒はみな「豊かな心を持ち、たくましく行動をしている」という観点で子どもを見つめることが教育の出発点ではないかとも反省したのである。

そこで、昭和60年度の研究の取り組みでは、生徒の社会的自立をめざす姿を、発達の違いと障害に応じたという観点で見直し、学校の中での教師活動を子どもの側にとって、保護者との連携を強化する中で、とらえようと試みたのである。

本年度は、その4年目となる。

2. 昭和63年度の研究の取り組み

今年度の本校の研究主題が「からだづくり」と決定したので、中学部では従来の研究を、そのままからだづくりという視点から継続して取り組もうという

ことにした。

Ⅲ. 中学部の研究の概要

1. はじめに

昨年度までの研究主題は、「発達に応じた個の育成と保護者との連携」であった。本年度も変わっていない。しかし、その研究主題をからだづくりという観点から見直してみようということであるから、当然めざすより具体的な目標を設定しておかないと、研究活動が共通理解できず混乱するだろう。そこで、「いきいきと行動する子」とめざす人間像を設定してみた。

設定の前提として、中学部では体づくりを健康を保つことと考へ、さらに健康な体には精神的な健康も含めて考へるという基本的な態度を共通理解した。その理由は、健康とは「健」も「康」も「すこやか」「やすらか」ということとであつて、個がその状態を保つことが健康な状態であり、諸活動の原点だと思ふからである。

さらに、健康な体には、情緒的安定・精神的安定が大きく左右するからである。言い換へると、体と心は不離一体のもので、これを分けて考へることは研究のための研究になつて、中学部がめざす「生きて働く力」の育成にはならないと考へたからである。

中学部では「いきいきと行動する子」をめざす研究的重点を、①生活リズムの確立 ②「朝の活動」の充実 ③性に関する指導の強化 ④コミュニケーションの確立 の4点とし、研究と取り組むことにした。その概要は以下のとおりである。

2. 研究主題の設定

研究主題「いきいきと行動する子」

中学部ではめざす子ども像として、「生活の中で生きて働く力を身につけた子」として創設以来指導に取り組んできた。今後もこのことに変更はない。

本年度設定した研究主題は、中学部のめざす子ども像(目標)を体づくりという課題から、より具体的に(より身近に)設定した目標である。研究の主題を達成することは、中学部がめざす「生きて働く力」に一步一步近づくことであると考へた。

そこで主題設定の理由だが、精薄児に特徴的に見られる無気力(活力の乏しさ)や意欲的な行動に持続性がない状態が、本校中学部の生徒には特に顕著に見られることから設定したものである。

特に、知的能力が重度化し心身の遅れの目立つ子ども達にとって、気力や意欲の発生・持続などということは容易なことではない。しかし、たとえ知能が遅れていても自分の足で歩き、自分の手で食べ、笑い、泣き、怒る子どもたちの生命力を見ると、まだまだ可能性を秘め、引き出してくれるのを待っているような気がしてならないのである。

従つて中学部では、3つの運動との取り組みを中心に自らの健康を保ち、いきいきと意欲的に行動する子をめざした指導の工夫・実践を研究に選んだのである。

さらに中学部になると、たとえ最重度の生徒であつても、著しい性的発達の見られる時期である。例外なく戸惑いが見られ、情緒の不安定な状態が生徒の日常生活に何らかの影響を及ぼしている。情緒的安定、心の開放をはかり、